

ホステリングマガジン vol.27 / 2021 Winter

JAPAN  
Youth Hostels, Inc.

# H<sup>ostelling</sup> Magazine



Cover Interview

川崎宗則

Play hard.

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。





# ランチパック



公式webサイト

ランチパック 検索

ランチパック  
情報をチェック!

公式Facebookページ  
[www.facebook.com/lunchpack.jp](http://www.facebook.com/lunchpack.jp)

# 水と生きる

未来っていきなりやってくるんじゃない。  
いつも、今が入り口なんだ。



100年先を考えて初めて、  
今すべきことが見えてくる。  
私たちサントリーが、「水」の仕事をしなが  
ら気づいたことでした。

水は、自然からいただく恵みです。

地球上の水蒸気が雨や雪になって山に降り、  
地下深くまでの長い旅をして、  
やっと人々の元に届く。

しかも、要する時間は、20年をゆうに超えます。

私たちのものづくりの原点は、  
この先も良質な水です。

たとしたら、私たちに大事なのは、

100年先をイメージする力。

そして、今ここにある山や森を  
もっと深く知り、守り、育てることだと、  
改めて思います。

ずっとずっと、

水と生きていきますように。

水と生きる **SUNTORY**

© Fujiko-Pro



# Vision

Principle and Philosophy

## **Inclusivity**

世界を超えて

## **Learning And Understanding**

考えよう

## **Sustainability**

僕らと子ども達の未来のことを

日本ユースホステル協会はユースホステルのビジョンに基づき、日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

※本誌の情報は2021年12月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会  
編集・発行人 寺島 眞

TEL. (03)5738-0546

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

## Line up

### 02 Cover Interview

川崎 宗則  
Play hard.

### 08 Youth Hostel Pick up

武雄温泉ユースホステル  
九州の魅力を掘り下げる足し算と引き算

### 12 Hostelling Magazine × 地球の歩き方

そろそろ旅の準備を始めよう！  
Iceland —アイスランド—

### 16 Sustainable Tourism

### 18 LiLiCoの映画で世界を旅しよう！

### 19 おしえて! 旅GIRL

### 20 松鳥むうの晴れときどき旅びより

### 22 YOUTH HOSTEL LIST

# Play hard.

## 川崎宗則

### PROFILE

川崎 宗則 (かわさき むねのり)

1981年生まれ、鹿児島県出身。  
1999年オフのドラフトで福岡ダイエーホークス(現・福岡ソフトバンクホークス)に入団。最多安打、盗塁王1回、ゴールデングラブ賞2回受賞。2006年、2009年のWBCでも活躍し、2012年からはメジャーリーグに挑戦。マリナーズ、ブルージェイズ、カブスを経て、2017年から日本球界に復帰。その後、2020年9月から独立リーグ・栃木ゴールデンブレースに所属している。

## 「お前はバスケ部じゃないだろ！」 周囲に止められて作った自分たちのチーム。

— ホークス、侍JAPAN、メジャーリーグ、そして現在の独立リーグ栃木ゴールデンブレースと、野球に人生を捧げてこられた川崎さんが野球に興味を持つきっかけはなんだったんですか？

僕は3人姉弟の末っ子で、姉と兄が1人ずついるんですけど、5つ歳が離れたお兄ちゃんが少年野球をやっていたんです。その応援に行っていたのが興味を持ったきっかけです。

— 最初に始めた習い事が野球だったんですか？

いや、野球部に入ったのは小学校3年生からで、保育園の年中の時からずっと空手を習ってました。空手は体を鍛える時はどうしても自分一人でやらないといけないんですけど、僕はどちらかというとチームプレーに興味があって。小学校でもドッチボールとかサッカーが好きだったんです。野球部に入ってからは、「チームとして戦う」ということを学ばせてもらって、いろんなルールや戦術、規律を学びました。やっぱりチームスポーツの方が僕には合っていましたね。

— 小学生の頃から将来の夢は「プロ野球選手」だったんですか？

プロを目指すことを現実的に考え始めたのは高校生の頃ですね。実は、中学に入学した時は、バスケ部に入ろうとしてたんです。

— えっ？バスケ部ですか？

当時『SLAM DUNK』が流行っていたのと、小学生の頃にいた野球チームでキャプテンとして全国大会に出たり、大会で優勝することができて、ちょっと「やり切った感」もあって。「楽しいもの」から「勝たないといけないもの」になった野球から解放されたくてバスケ部を覗いてみたりしたんだけど、結局は引き戻されちゃって。

— それは…みんなが放っておかないですよ(笑)

同級生たちからも「ちょっと！待って待って!!」って言われるし、先生達も「お前はバスケ部じゃないだろ！」って……(笑)。

— その時バスケットボールに転向していたら、世界のムネリンは誕生してなかったかもしれないですね。

僕の入った中学校の野球部は僕にとってはすごく良い環境で、指導するコーチや監督がいなかったんですよ。なので、部員みんなでメニューを考えて毎日練習してました。小学生だとしっかりした大人がいないと、ルールがわからなくてケガをしちゃうこともあるんですけど、中学生になると色々わかるし、ちゃんと試合もできるんです。僕たちは県大会でベスト4までいけた。僕はその時副キャプテンで、当時のキャプテンとは今でもその話をするんです。「指導者がいるチームの中で、よく自分たちで考えてやれたよね」って。中学時代の「自分たちだけで考えてできた」という経験が僕の野球の土台になっていると思います。

そばに指示を出す大人がいると、子どもはつい「それに従おう…」と思ってしまう。いなかったらいなかったで野球はできるんです、絶対に。だから、うちの子もまたちや悩んでいる中学生の子たちにも「もう自分でできるよ。大人に頼らなくても、今は自分で調べられるだろ？ InstagramとかSNSで調べられるじゃん!」ってアドバイスするんです。

— 川崎さんが中学生の頃は、どのように野球を学んでいたんですか？

本を読んだり、強い高校がどんな練習をしているのか電車に乗って見に行ったりしましたね。で、「あ、こういう練習をしてるんだ！俺らもやってみよう！」って、自分たちで学んでいきました。だって、自分たちのチームなんだもん(笑)。

強豪校の指導者が野球を教えてくれる環境は、それはそれで良いことですよ。でも、スポーツで大事なものは「自分で考えて失敗する」ってことだと思うんです。スポーツって、成功することばかりみんな考えるけど、特に学童野球なんかは失敗するためのもの。しかも、その失敗は、「自分で考えて失敗する」のが重要。そうすれば、次も自分で考えて、今度は成功しようとするんだから。

## ドラフトにかかったのは「運」。人生何が起こるか本当にわからない。

— 中学時代に自主性を身につけたことが、型にはまらない川崎さんの野球人生の礎を築いたんですね。

普通の野球選手って、例えば僕の知っている先輩たちや、プロ野球の友達みんな少年野球からずっと野球、野球、野球。中学校も優秀なチームに入って、高校も寮に入ったり甲子園に出たりして、ひたすら野球の日々を送って、ドラフトにかかる、みたいな感じなんです。でも僕は中学でバスケット部に入ろうとしたし、高校の始めまではバンドをやってたし——

— えっ？バンド??

はい、GLAYとかL'Arc ~en~Ciel (ラルク アン シエル)のコピーバンドをやってました。中学時代に先輩に「お前、ベースやれ」って誘われて。高校まで続けてたんだけど、もの見事に高校の先輩にバレて……。それは駄目だよ。君は野球の推薦で高校に入ったんだから」とお叱りを受けまして。「はい、その通りです」と(苦笑)。ベースは同級生にあげました。「そばにあると弾きなくなるから」って(笑)。

— そんな川崎さんが高校三年生の時、1999年に当時の福岡ダイエーホークス(現：ソフトバンクホークス)からドラフト4位で指名されてプロ野球の世界に入ります。ドラフトで指名されるってすごいことですね！

僕がドラフトにかかったのは「運」ですね。全く予想していなかったの。スカウトの方が見に来てるっていうのは聞いてはいたんですけど、ドラフトにかかるのは、甲子園に出場するような選手だけだと思っていましたから。実はその時大学からのお誘いもあったんです。当時自分の課題は実戦の経験が足りないことだと自分でも分かっていて、身体能力では負けないけど、技術的には勝てないと思っていました。それで、「大学に行って、4年間しっかりトレーニングして、22歳でプロのテストを受けよう！」と思って、「大学に進学したい」って恐る恐るお袋に話したら、「良いよ」って認めてくれて。近くのお肉屋さんでパートを始めて学費を貯めてくれたんです。なので僕も「よし、大学でがんばろう！」と。そしたらドラフト4位。僕もびっくり、家族も監督も全員びっくり。人生何が起こるか本当にわからないですね。

## “自由気ままな川崎宗則”でいること それが、僕を唯一動かしてくれるエネルギー

— プロ野球選手になって、はじめは心が折れてしまったと別のインタビューで拝見しました。

折れましたね〜。今までが我流なんです、全部。小学校から高校まで我流で来てるから、プロに入った時にプロのコーチからいきなり教えられても頭に入らなかった。難しすぎて。

— そこに食らい付いていくために、どんな努力をされたんでしょうか？

いや、1回諦めました。食らいつこうとか、歯を食いしばろうか思ってたから苦しかったんだよね。諦めるまで3ヶ月ぐらいは苦しかった。で、理想のプロ野球選手像を目指すのを諦めて、“お給料がもらえて”“寮で練習し放題”“ご飯も食べ放題”っていう今の環境を楽しもう。どうせ1年でクビになるんだから、この環境を満喫した方が良いと思いついて。そこからですね、全てが動くようになったのは。

— 諦めたら上手くいくようになったということですか？

何かを背負ったり、何かに縛られると、僕は身体が動かない。「自由気ままな川崎宗則でいること。それが僕を唯一動かしてくれるエネルギーなんだ」っていうことが、もしかしたら18歳の時に分かったのかもしれない。本当だったら、「なんとか歯を食いしばって」とか言いたいんだけど、そうじゃなかった。諦めることは決して悪いことじゃないんだって、今は正直に言うようにしています。ざっと1年目は教えてもらっても聞く器がなかったんだよね。聞ける器があれば良いけど、「僕はそのままだと器が割れてしまう」って思ったから、「だったら聞かなくていいや」って。自分が壊れなくなかったから。それで聞いているフリだけしてたんだけど、1年目でクビにならなかった。それで、2年目になると、今まで頭に入ってたコーチや先輩の言葉がポツポツと頭に入ってくるようになって。で、3年目になると、いよいよわかるようになって(笑)。

## サインを待つばかりの 人生を歩んでほしくない

— そこから一軍で活躍されるようになったんですね。

当時二軍の先輩たちも化け物だと思いつつながら1年間過ごしたのに、2年目で一軍のキャンプに呼ばれた時は「うわー、こりゃ無理だ！」と思いました。でも、2年目は1年目より器の容量が大きくなって分、新しく吸収すれば勝負できるかもと思うようになっていて、2年目の終わりに一軍に上げてもらったんです。一軍に上がって初めての試合会場は、神戸のグリーンスタジアム。僕は中学生の頃からイチローさんが大好きで、右バッターから左バッターに変えたのもイチローさんの影響ってぐらい。だから本当に嬉しくて。ショートでフル出場させてもらって、一軍の選手たちと試合をさせてもらって、すごく緊張したけど、めちゃくちゃ楽しかった！で、「ここでプレーし続けるにはどうすればいいの？」を考えるようになったんです。

— まさかその数年後にイチローさんとチームメイトになるなんて。しかも、メジャーで。

ドラマみたいですね、人生は。まさかのバンドマンから……(笑)。バンドをやっていたことは、本当はずっと隠れていたんです。そんなプロ野球選手いなかったし、「プロ野球選手を志す子たちに良い影響を与えないんじゃないかな」って。でも、今の時代だからこそ言いたいん



です。「みんなには、いろんなことをしてほしい」って。野球はサインのスポーツで、“指示待ち”なんです。でも、社会で指示を待つような仕事はこれからどんどん少なくなっていく。それなのにずっとサインを待っているようだ、仕事もできないし、好きな人に気持ちを伝えることもできない。旅行に行きたいとか、欲しいものを買ったりもできない。そう考えた時に、僕の人生をみんなに正直に話してもいいのかなって。

## イチローさんを追いかけて日本を飛び出したことで世界を知ることができた

— メジャーに挑戦されたことについてぜひお伺いしたいです！  
川崎さんがメジャーに挑戦しようと思ったのはいつ頃だったのでしょうか？

メジャーに挑戦しようと思ったのは、2006年にWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）に出させてもらった時。アメリカでプレーした時の球場の雰囲気とかアメリカの選手たちのプレースタイルを見て、「あ、こんな野球があるんだ!!」と思ったんです。

— WBCで感じたアメリカの野球ってどんなものだったんですか？

球場の造りだったり、土の匂いだったり、あとはクラブハウスで選手たちがリラックスして野球を楽しんでいる姿だったり。「Play hard」といって、激しくありながらもリラックスしている姿を見て、「僕らがやっている野球とは違うな」と思いました。勝たないといけない、負けたらダメ、ミスしたらダメ、●●しないといけない……っていう、縛られた状況です。野球とは違うと思いましたね。

— それから2011年にメジャーリーグで、イチローさんと同じチームに所属するんですね。

そう、WBCから5年かかってFA（※）を取って、「イチローさんと同じチームがいい」ということでシアトル・マリナーズに行きました。当時、ホー

クスからは大型契約のオファーがあったんですけど、全然迷いがなかった。お給料はもちろん大事ですけど、アメリカに行くことでゼロになるわけじゃない。何か高いものが欲しいとか、毎日フレンチを食べたい、とかはない。プロテインが飲めて、たまにおいしいご飯食べられればいい、という人間なので（笑）。ホークスの契約を断る時は、家族には「何考えてんの？」ってとても反対されましたけど、あれから10年経って、「あの時アメリカに行って良かった」って思います。行ったからこそ、こういうインタビューのお仕事ももらえるし、今になって返ってきたものは果てしない。あの時イチローさんを追いかけて行った判断は間違っていなかった。日本しか知らなかった自分が海外に出て、海外を知れたことは、僕の人生にとって本当に良いことだったと思います。

## 言葉は所詮「暗号」でしかない

— 当時英語が全く話せない状態での挑戦だったんですね？

そうなんです、これが。言葉の問題は全然頭に入れていなかったんですね（笑）。「とりあえず行って、キャッチボールすれば良いんだろ？」「ルールは一緒だし。OKOK！」って。そしたら、全然違ったの！だからもう大変で…。通訳なしでミーティングに参加して、話してる内容がわからないんだけど、うんうんって頷いて。でも結局わからないから偉そうな人に適当についていくと、「カワ！どこに行くんだ。お前はこっちだ」って連れて行かれて（笑）。

— 言葉の問題はどうやって解決されたんですか？

毎日グラウンドに行って、奴ら（チームメイト）と戯れながら覚えていった感じですね。よく食事とかバーに連れ出してもらいました。もちろん日本人は僕一人。お酒を飲むと恥ずかしくなくなるので、バンバンいけるんですよ（笑）。それで真剣な話もできるようになって、いろんなことを教えてもらいました。グラウンドではみんな自分のことでもいいいばいばい

※Free Agentの略称。選手があらゆる球団と選手契約ができる権利のことを指す。

けど、バーに行くとか教えてくれる。「もっとこうの方がいいんじゃない?」「なんで?日本だとこうなんだけど」「それだとどうだろ?」って感じで。さすが野球が生まれた国だね。僕は野球のことをプロになってプロの指導者から教えてもらったけど、奴らはそれ以上にレベルの高い野球を教えてくださいました。

— ジェスチャーとかでコミュニケーションをとっていたんですか?

ジェスチャーもあるけど、真剣な話の時はネットをつかって翻訳したり。でも途中からは、ほぼ言葉がわかるようになってきて。奴らも奴らで日本の文化を知りたいから、こっちも説明するために英語を使いたくなるんですよ。そうなってくると、家でちょっと勉強しようって本を買ってみたり。そうやってちょっとずつ学んでいきました。

— きっと、置かれた環境で必要に迫られたらそういう頭に切り替わるんでしょうね。

そうなんです。英語を勉強するなら行ってみたいと。学校では「Hello. How are you?」「I'm fine, thank you. And you?」なんて習うけど、あんなの海外で言わないですよ。「What's up dude?」です。最初「How are you?」ってチームメイトに挨拶したら「やめとけやめとけ!」と言われて、「え、なんで?そうやって習ったんだけど」「バカか、そんなの使わないよ。『What's up?』でいいんだよ!」ってわかるわけ。学校で学んだ英語っていうのは、テストのためのものだけど、英会話はまた違うんだなと思いました。英会話は、一文字ちがっても全然いいんですよ。100点じゃなくていい。ただ、0点じゃダメ。20点まで持っていけばいい。でも、日本人は「100点じゃないと失礼にあたる」とか思っちゃうんですよ。100点を目指しているからしゃべれない。でも、本当は20点でいいんです。残りの80点は相手がカバーしてくれる。そういう心構えていると、話しているうちにだんだん「この20点を30点にしてみよう」って思えてくるんです。

— なるほど!まずは話してチームメイトとのコミュニケーションを増やして、どんどん言葉を覚えていったんですね。

僕はね、言葉は通じなくても気が合う奴かどうか、わかるんです。言葉というのは所詮、誰かが作った「暗号」だと思っているんです。その暗号に囚われるのは大きな間違い。日本人は敬語を使いなさいとか、言葉の使い分けが大事なんだけど、案外世界ではそんなことを考えていなくて。もっと大事なことがあるわけで。特に、ロッカールームが近かった南米系のチームメイトたちとはめちゃくちゃ気が合いました。彼らは僕に「Play hard」を教えてくださいました。そういう考え方は、日本にいた頃はなかったです。勝たなきゃいけない。●●しなきゃいけない。優勝できなかつたら、プレーオフに行けなかつたら……できなければ「ああ、だめなんだ俺らは」「残念」って。本当は違うのに。

## 中学時代のように野球に夢中になれる そんな環境がアメリカにはあった

— 現地で「あ、受け入れられたな」と思った瞬間はありますか?

僕はメジャーリーガーじゃなくてマイナーリーガーなんです。アメリカにいた頃は、マイナーに落ちたりメジャーに上がったりが何度もあって、実はマイナーにいた期間の方が長かったんです。で、マイナーだと、バスで10時間かけて移動とか、ご飯の用意もなかったり、試合が終わって飛行機に乗ってそのまま試合とか。すごく大変だったんです。そういうのを乗り越え

てメジャーに上がってきた時に、メジャーリーガーたちが「おー、カワ、日本に帰ったんじゃないかと思ったよ!」って迎えてくれるんですけど、「よくメジャーに上がって来たな!みんなで飯行くぞ!」って。その時ですかね。嬉しいなあ、って思った。チームメイトたちもみんなマイナーから始まって、そこから上がってきたから、辛さがわかるんでしょうね。マイナーは大変だけど、海外にいること自体が僕にとっては自由だし、日本語が聞こえない環境は野球に集中できた。だからモチベーションは毎日高かったし、「毎日グラウンドに行って、何か1つ成長しよう」って考えていました。それは僕が中学生の頃にやっていたことと一緒に。グラウンドに行って、自分たちで考えて何かをやる。アメリカにはそれができる自立した環境がありました。

## 決断に悩み苦しむような出来事を見つけれ た時点で、自分を褒めてあげてほしい

— これまでの長い野球人生の中で、いつか「楽しい!」と思える瞬間でしたか?

この前の最終戦の最後の打席で、「ばーん!」と2ベースヒットを打って駆け抜けた時は最高でしたね。僕は、過去のことは忘れるんですよ。だからこの

こともきっと忘れると思う(笑)。

今後は僕が海外で学んだ空気感を、今のブレーブスのチームでも実現させたいですね。勝負の結末は神様しか知らないんだから、見えないものに追われて苦しむより、目の前のゴロを捌くことの積み重ねをしていく方が、よっぽど野球をプレーする意味があると思っています。その方が、勝つか負けるかに囚われて苦しむよりよっぽど野球というスポーツを楽しむと感じられるから。とにかく、良いプレーをどんどん増やしていく。それが大事なことだと思っています。

— 海外や新しい環境に飛び込むことに対して躊躇いがある人に、どんな言葉をかけたいですか?

躊躇することは大正解です!それは当たり前。躊躇しないといけなし、悩み苦しまないといけなし。僕もそうでしたから。それで良いんです。悩んでいることが大事なんです。行くか行かないかはどっちだって良い。ただ、そのことに対して自分が「こうしたいんだ」って自分の意思を持った時点で、僕は「勝ち」だと思う。そのことに興味があるんだもん。そうやって思うこと自体が素晴らしいことなので、自分を褒めてほしいですね。

## 川崎宗則公式YouTubeチャンネル「宗チャンネル」



栃木ゴールデンブレーブス所属川崎宗則の姿に密着する動画はもちろん、川崎宗則流の少年野球指導方法なども公開中!

<https://www.youtube.com/channel/UC85NQwArVlqCbDzrWVik46A>



## Instagramの公式アカウント

川崎宗則日常の1コマをほぼ毎日元気に更新! 番組出演の裏側や、日頃のトレーニングの様子もアップ!

<https://www.instagram.com/mune.kawasaki.official/>



川崎宗則さん

# サイン入り色紙 & ボール 抽選でそれぞれ1名様にプレゼント!

ご応募は日本ユースホステル協会ホームページの専用申し込みフォームから!

<http://www.jyh.or.jp/hm/> ※当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます

応募締切 2022年2月末日



## つづきをダウンロード(無料)



Hostelling Magazine vol.27  
まとめてダウンロード



LiLiCoの映画で世界を旅しよう！…… P18



Cover Interview …… P02

川崎 宗則  
Play hard.



おしえて！旅GIRL …… P19



Youth Hostel Pick up …… P08

武雄温泉ユースホステル  
九州の魅力を抑り下げる足し算と引き算



松島むうの晴れときどき旅びより …… P20



Hostelling Magazine x 地球の歩き方 … P12

そろそろ旅の準備を始めよう！  
Iceland アイスランド



YOUTH HOSTEL LIST …… P22



Sustainable Tourism …… P16

発行所：一般財団法人日本ユースホステル協会

編集・発行人 寺島眞

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌の情報は2021年12月20日現在のものです。

変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。